

【研究論文】

J・クリュス『ティム・ターラー あるいは売られた笑い』
における笑顔の取引

— 「悪魔との契約」のモチーフを中心に —

Der Handel ums „Lachen“ im Roman „Timm Thaler oder
Das verkaufte Lachen“ von James Krüss

— In besonderer Hinsicht auf das Motiv „Teufelspakt“ —

漆 谷 球美子
Kumiko URUSHIDANI

はじめに

ジェームス・クリュス (James Krüss, 1926-1997)¹は第二次世界大戦後に活躍したドイツの児童文学作家である。1926年5月31日、北海のヘルゴラント島で生まれたクリュスは、16歳までこの島で過ごす、第二次世界大戦中の空襲のためドイツ本土へ避難することとなった²。1956年、彼は最初の児童文学『ロプスター岩礁の灯台』(*Der Leuchtturm auf den Hummerklippen*)を出版し人気を獲得、1960年『ひいおじいさんとぼく』(*Mein Urgroßvater und ich*, 1959)でドイツ児童文学賞を受賞し、その地位を確立した³。1966年にはドイツを離れ、スペインのグランカナリア諸島へ引っ越すが、その後も執筆活動や言語学の研究など精力的に活動を続けた⁴。クリュスは、戦後ドイツの児童文学において「ファンタジー」を広く行き渡らせた作家として知られている⁵。

本稿では、クリュスが1962年に出版した『ティム・ターラー あるいは売られた笑い』(*Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen*)⁶を取り上げる。本作品は、主人公ティム・ターラーと悪魔リュフェットとが交わした「悪魔との契約」が物語の起点となっている。この伝統的なモチーフを採用した作品は、伝承文学から文学作品に至るまで数多く存在しており、ドイツ文学においては、ゲー

1 James Krüssの名前は、ジェームス (植田敏郎訳)、ジェームズ (大塚雄三訳)、ジェイムス (森川弘子訳)、ジェイムズ (野村滋訳) などと訳されているが、本稿では中西敏夫編『児童文学者人名事典—外国人作家編—』出版文化研究会 2000年 に倣い「ジェームス・クリュス」と表記する。

2 Vgl. Klaus Doderer: *James Krüss Insulaner und Weltbürger*. Hamburg: CARLSEN Verlag GmbH, 2009, S. 21.

3 Vgl. ebenda, S. 28.

4 Vgl. ebenda, S. 21f.

5 野村滋『ドイツの子どもの本—大人の本とのつながり』白水社 1991年 29頁、107-109頁参照。

6 James Krüss: *Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen*. Hamburg: Verlag Friedrich Oetinger, 2006.

本書からの引用は本文中にTimmと略記し、頁数を付すことにする。日本語訳については、森川弘子訳『笑顔を買った少年』未知谷 2004年、を参照したが、本文中の訳は筆者がおこなった。なお固有名詞は、森川訳に倣った。

テ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の『ファウスト』 (*Faust*, 1808/1832)、シャミッソー (Adelbert von Chamisso, 1781-1838) の『ペーター・シュレミールの不思議な物語』 (*Peter Schlemihls Wundersame Geschichte*, 1814)、E. T. A. ホフマン (Ernst Theodor Amadeus Hoffmann, 1776-1822) の『大晦日の夜の冒険』 (*Die Abenteuer der Silvester-Nacht*, 1815)⁷、ハウフ (Wilhelm Hauff, 1802-1827) の『冷たい心臓』 (*Das kalte Herz*, 1828)⁸ などが挙げられる。詳細は異なるが、これらの作品は悪魔との契約によって主人公が成長する姿が描かれている。そしてクリュスは20世紀を舞台にした「悪魔との契約」の物語として『ティム・ターラー』を執筆した。本作品ではティムは悪魔リュフェットと契約を結び、副題にも示されているように自身の「笑い」を悪魔に売る。笑顔を失ったティムはやがてその重要性に気付き、それを取り戻すためにリュフェットに近づく。

本稿では『ティム・ターラー』に描かれた「悪魔との契約」の場面と、前述した先行作品である『ファウスト』、『ペーター・シュレミール』の2作品⁹を比較し、その共通点と相違点を指摘することで、本作品の特徴を考察する。さらに、主人公・悪魔・取引対象の3つの視点から、クリュスが『ティム・ターラー』に取り入れた「悪魔との契約」のモチーフにおける現代性を明らかにしていく。

第1章 『ファウスト』および『ペーター・シュレミール』における「悪魔との契約」

第1節 『ファウスト』

1. 契約の場面と取引対象

ドイツ文学において最も有名な「悪魔との契約」の物語として挙げられる作品がゲーテの『ファウスト』である。『ファウスト』は第一部と第二部に分かれており、第一部「書齋」の場で主人公ファウストと悪魔メフィストフェレスが取引をおこなう、次のような有名な場面がある。

7 『大晦日の夜の冒険』では、主人公エラスムスが美しい女に化けた悪魔ジュリエッタに自分の鏡像を渡してしまう。鏡像がないという大きな問題を抱え、苦しい立場に追い込まれたエラスムスは、彼女に鏡像の返却を願い出る。彼の要求に対し、彼女の仲間であるダッペルトウト医師は、鏡像を返す代わりにエラスムスの妻子を毒殺しろと要求する。しかし殺害を実行出来なかったエラスムスはジュリエッタに「鏡像を返してくれ。そして肉体と生命と魂さえもきみのものにしてくれ。」と願い出る。ジュリエッタは、「わたしは親しい友人ダッペルトウトにわが妻子に関する生殺与奪の権を委ね、わたしを束縛する絆を解くことを一任する。それは今後、肉体と不死の魂もろともジュリエッタのものになろうと思うからである。わたしは彼女を妻として選び、改めて誓いをたてて永遠に結ばれることを願う」という文章を紙に書き、血の署名をすることを要求する。しかしエラスムスの妻が現れ、契約は実行されずに悪魔は姿を消す。 Vgl. E. T. A. Hoffmann: *Die Abenteuer der Sylvester-Nacht*. In: E. T. A. Hoffmann *Fantasiestücke in Callott's Manier Werke 1814*. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag, 1993.

8 『冷たい心臓』では、主人公の青年ペーター・ムンクと悪魔であるオランダ人ミヒエル (Holländer Michel) が契約を結ぶ。ミヒエルは、「金」を与える代わりにペーターの「生きている心臓」を要求する。ペーターは見返りとして金と名声を手に入れる。ペーターは金目的で心臓を渡してしまうが、心臓を失ったことで感情をも失くしてしまう。彼は貧しい母親を思い遣ることなく追い出し、貧しい者に飲食を振舞った妻に暴力をふるい殺してしまう。妻の死をきっかけに罪の意識が芽生えたペーターの前に、ガラス工の小人の妖精が現れ、悪魔と対決する知恵を授ける。ミヒエルから心臓を取り戻すことに成功したペーターは悔い改め、自身の力で成功し、貧しい人びとを助ける温かい心臓の持ち主となる。 Vgl. Wilhelm Hauff: *Das kalte Herz. / Das kalte Herz II*. In: *Hauffs Werke in zwei Bänden. Zweiter Band*. Berlin und Weimar: Aufbau-Verlag, 1970.

9 これらの先行作品は『ティム・ターラー』において直接の言及がある。

メフィストフェレス「私はこの世界であなたに仕える義務を負いましょう。あなたの指図に従って、片時も休まず働きましょう。その代りあちらの世界で再び出会うときには、あなたが私に同じことをしていただきたい。」

ファウスト「(…) さあ、賭をしよう。」

メフィストフェレス「よし、賛成だ。」

ファウスト「では約束したぞ。私がある瞬間に対して、留まれ、お前はあまりに美しい、と言えば、その時にお前は私を縛り上げるがいい 私は喜んで地獄に行こう。」(…)

メフィストフェレス「どんな紙きれだっていいですよ。あなたが血のしずくで署名をしてくれるというのなら。」

ファウスト「それでお前を満足させるというのなら、馬鹿げたことだがそうしよう。」¹⁰

メフィストフェレスはファウストにあの世で盲従することを求め、その代価として生前のファウストの望みを出来るだけ叶えるよう努めることを約束する。メフィストフェレスはファウストと行動を共にし、彼の欲求を満たすための様々な体験を実現する。しかしファウストは、悪魔が提供するあらゆる贈物にも満足を見出すことはなかった。多くの願望を実現させたファウストであったが、やがて彼は快楽を追い求めることを止め、自分自身のためでなく人類のために積極的に働くことに幸福を見出し、死を迎える。ファウストの魂はメフィストフェレスの手に落ちることなく、天の恩寵とグレートヒェンの愛によって救われる。

『ファウスト』において主人公は実在したファウスト博士をモデルとしている。ゲーテのほかにもレッシング (Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781) やトーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955) などがファウストを題材とした作品を出版しており、また民衆本や人形芝居としても各地で上演されている。ファウスト伝説のモデルとなったゲオルグ・ファウスト (Georg Faust) は15世紀から16世紀前半に実在した人物であり、医師・錬金術師・占星家として知られるようになった人文学者である。彼は死後、魔術師と呼ばれるようになり、様々な伝説が生まれ、医学者をめぐる魔法物語の多くが彼に由来すると伝えられるようになったとされている¹¹。

小塩節氏は著書の中で、ファウスト博士をモデルとする民衆本や人形芝居ではメフィストフェレスと取引をする際に「契約」という言葉が使われていたが、ゲーテは『ファウスト』において「契約」ではなくて「賭け」という言葉を用いており、「契約」という言葉を全編通して用いていないことを指摘している¹²。同氏はこの事実を踏まえて、ゲーテのファウストは悪魔と対等な立場に立ち、自身

10 Johann Wolfgang von Goethe: *Faust. Texte*. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag, 1999, S. 75ff.

11 溝井裕一『ファウスト伝説 悪魔と魔法の西洋文化史』文理閣 2009年 2-57頁および 小塩節『ファウスト ヨーロッパ的人間の原型』日本YMCA同盟出版部 1972年 15-22頁参照。

12 同書 62-66頁参照。

の尊厳を「売る」ことはしない近代人であるからだと解釈している¹³。そもそも『ファウスト』の冒頭には、神がメフィストフェレスと賭けをおこなう場面がある。神はファウストの名を挙げ¹⁴、彼が悪魔に惑わされることはないと主張する。その言葉を聞いたメフィストフェレスは、ファウストを誘惑によって正しき道からはずすことができると主張し、彼らの賭けが成立する。つまりメフィストフェレスは、神との賭けを受けたために、ファウストに接触を図り、彼と死後の魂を巡る賭けをおこなったのである。

『ティム・ターラー』における『ファウスト』への言及は、世界一の資産家となったティムの後見人として現れたリュフェットが、ティムに対し悪魔や呪文、ファウストと取引したメフィストフェレスについて詳しく教えようと語りだす場面にある。この時にリュフェットは、ファウスト博士が悪魔に誓った文句¹⁵をティムに教え、呪いをかけようと呪文を唱える。

2. 主人公ファウストと悪魔メフィストフェレス

主人公ファウストは学者として哲学・法学・医学・神学の4つの学問を徹底的に研究しつくすも、知識を得るだけでは人間の生命や存在についての答えを見つけれず絶望している。彼は悪魔や霊の力によってその意義を知ろうと考え、悪魔との契約をおこなった。ファウストは自身の疑問のために学問を奥深くまで研究するような努力家であり、人間の存在意義とその充実のために行動することをいとわない、強い向上心を兼ね備えた人物である。ファウストは自身の欲求を満たすために様々な体験を、メフィストフェレスを使って実現するも、求めていた答えを見つけることはできなかった。

物語の中で、ファウストが心惹かれる女性グレートヒエンが登場する。ファウストは彼女を手に入れることをメフィストフェレスに命じ、策略の末に彼女と結ばれる。グレートヒエンはファウストを愛するが、その結果、母親を死に追いやり、兄を殺され、身籠った子供をも自らの手で殺してしまう。子殺しの女として裁かれたグレートヒエンが牢の中で死を待つ間、ファウストは、彼女を強引に連れ去ろうとする。しかし、グレートヒエンはファウストに自身の運命を受け入れると告げ、「また会いましょう」と言葉を残す。後にファウストが「留まれ お前は美しい」という約束の言葉を口にし、メフィストフェレスに連れて行かれそうになった際に、グレートヒエンは彼のもとに再度現れ、天へとファウストをいざなう。グレートヒエンは愛を体現する存在として描かれ、彼女の存在によってファウストは救われるのである。

13 同書 62-66頁参照。

14 ここでのファウストは人類一般を代表している。道家忠道訳『ファウスト その源流と発展』朝日出版社 1974年66頁参照。

15 これは、Bagabi laca bachabe Lamac cahi achababe (….) “という呪文であるが、実際にファウストが悪魔に言った文句であるかは定かではない。ただしこの呪文は古くから存在しており、この呪文の起源については今でも議論が続いている。この呪文は、” Eko Eko Azarak (….) ” という呪文と対を成して使われる。レイ・ブックラントはかつて、この呪文はヘブライ語あるいはギリシア語を起源に持つと主張した。しかしその後ミヒャエル・ハリソンがこの呪文が古代ヨーロッパの魔術の証拠であり、バスク語を起源としていると主張した。Vgl. James R. Lewis: *Magical Religion and Modern Witchcraft*. Albany: State University of New York Press 1996, S. 174ff.

ファウストは、自身の探求心を満たすことを目的に行動してきたが、彼が心から幸福だと感じた出来事は、「自由な土地に自由な民と共に暮らす」という共同体を作ろうと考えた時であった。盲目となったファウストは、周りから聞こえる穴を掘る音を、彼の夢のために労働している音だと勘違いをし、約束の言葉を発するのであった。ファウストは絶えず人生とは何かを考え、それを満たすものを探し続けたのである。

ファウストが、新しい知識や人生の意義を見出そうと前進する存在であるならば、その反対の存在として登場するのが、悪魔メフィストフェレスである。ファウストと初めて会う場面で、メフィストフェレスは「むく犬」(der Pudel)の姿で登場する。このむく犬の異変に気付いたファウストが呪文を唱えたために、メフィストフェレスは遍歴学生の格好でファウストに正体を現した¹⁶。このようにメフィストフェレスは変幻自在であるため、その時々に応じた姿形でファウストと行動を共にする。メフィストフェレス (Mephistopheles) という名前の由来は、中世後期に「光を愛さない」を意味するギリシア語の象徴的な三つの言葉¹⁷から作られたと考えられており¹⁸、コラン・ド・プランシーの『地獄の辞典』によれば、メフィストフェレスは「冷淡な意地悪さ、涙を嘲笑う辛辣な笑い、人の苦痛を見るときの冷酷な喜びが特徴である。彼はからかいによって美德を非難し、才能ある人に侮辱を浴びせ、中傷という錆で栄光の輝きを腐食させる」¹⁹性格の悪魔である。ファウストに「お前は何者だ」と尋ねられたメフィストフェレスは、「私は常に否定する精神です。(…) というわけで あなたがたが罪と呼び 破壊と呼び そして悪と呼ぶものすべてが 私の得意分野なのです。」²⁰と答える。この言葉からもわかるように、メフィストフェレスは全てを否定するものとして登場する。メフィストフェレスの存在意義についてアルベルト・ビルショフスキは「嘲笑と風刺そのもの」²¹と解釈し、小塩節氏は「この地上に存在するもの、価値あるものを絶滅しようとする意志、あるいは存在に対する憎悪こそがメフィストフェレスの本質なのである」²²と指摘している。

メフィストフェレスはファウストの願いを叶えながら、様々な手で彼を快樂に溺れさせようと画策する。それも全て、神との賭けに勝ち、人間の魂を手に入れるためであった。思い通りに事が運ぶにつれ、メフィストフェレスはファウストが自身の手中にあると思い、より狡猾に立ち回り、粗暴で下品な態度になっていく。しかしメフィストフェレスの行動すべてが、ファウストを貶めることへ繋がるわけではなく、例えばグレートヒェンの悲劇も最終的にはファウストに真実の愛を気付かせること

16 Johann Wolfgang von Goethe: *Faust. Texte.* a.a.O., S. 60.

17 メフィストフェレス (Mephistopheles) という名前は、おそらくルネサンスの人文学者がギリシア、ラテン、ヘブールの要素に頼って新しく作った言葉である。作り手もその意図も起源も分かっていない。主要な要素は、おそらくギリシア語の否定語 *mē, phōs, photos* (光), *philos* (愛する者) である。したがって「光を愛さない者」という意味を持つが、これはルシファー「光をもたらす者」という名の皮肉なパロディであると指摘されている。J.B.ラッセル (野村美紀子訳) 『メフィストフェレス—近代世界の悪魔』 教文館 1991年 56-58頁参照。

18 フレッド・ゲティングス (大瀧啓裕訳) 『悪魔の事典』 青土社 2008年 406頁参照。

19 コラン・ド・プランシー (床鍋剛彦訳) 『地獄の辞典』 講談社 1990年 283頁。

20 Johann Wolfgang von Goethe: *Faust. Texte.* a.a.O., S. 60-64.

21 アルベルト・ビルショフスキ (高橋義孝、佐藤正樹訳) 『ゲーテ その生涯と作品』 岩波書店 1996年 1155頁参照。

22 小塩節 前掲書 116頁。

となる。ファウストが人生における探求心を持ち続けているのに対し、メフィストフェレスはそれらすべてを否定し、悪へと置き換える存在なのである。

このように、ファウストとメフィストフェレスは相反する衝動を持ち合わせており、ファウストが自分の欲求を実現するための活動的な努力や飛躍への衝動を表しているのに対し、メフィストフェレスは無常、無価値、永遠に無意味な空虚の世界観を表現しているのである²³。

第2節 『ペーター・シュレミール』

1. 影の取引

『ペーター・シュレミール』では、主人公シュレミールが悪魔である灰色の男 (der graue Mann) と契約をおこなう。灰色の男は第一の取引として「影」と「幸運の財布 (ein Glückssäckel)」の交換を、第二の取引として「シュレミールが失った影の返却」と「死後の魂」の取引を提案する。灰色の男が欲している取引対象は死後の魂であるが、それ以前に、契約者が不必要と考え、譲り渡す可能性の高い影を手に入れることによって、魂の契約を有利に進めようとする。このように『ペーター・シュレミール』では2段階の取引がおこなわれるという特徴がある。

「私 (=灰色の男) はここで即座にあなた (=シュレミール) の高貴な影を拾い上げ、私のものにする許可を求めただけです。」(…)「幸運の財布ですって！」私は彼の話を通りました。「よし、承知した。幸運の財布と交換で、あなたは私の影を手に入れるということで、話は決まりだ。」私は男の手を握りました。すると男はこちらの手を握り返し、(…) 私の影を頭のとっぺんから足の先まできれいに草の上からもち上げてクルクルと巻きとり、折りたたんで、ポケットに収めました²⁴。

シュレミールに影の返却を求められた灰色の男は、その代償として死後の魂の提供を求める。

「私は記念にちょっとしたことをお願いに来たのです。あなたはただこの書面にサインをするだけでいいのです。」羊皮紙には次のように書いてあった。「この署名に基づいて、私はこの書類の所有者に私の体から自然離脱した後の魂を遺贈することとする。」私は驚きのあまり無言で、書面と灰色の見知らぬ男を交互に見つめました。そうしている間に彼は、新しく削った驚ペンで私の手にある真新しい傷から流れる血のしずくにペン先を浸し、私に差し出しました²⁵。

23 アルベルト・ビルショフスキ 前掲書 1155-1156頁参照。

24 Adelbert von Chamisso: *Peter Schlemihls Wundersame Geschichte*. In: *Adelbert von Chamisso Sämtliche Werke in zwei Bänden. Zweiter Band Prosa*. München, Wien: Carl Hanser Verlag, 1982, S. 28f.

25 Chamisso, Adelbert von: *Peter Schlemihls Wundersame Geschichte*. a.a.O., S. 51.

灰色の男が最終的に求めるものは「死後の魂」だが、その前に魂よりも譲り渡しやすい影をシュレミールに要求する。シュレミールは影の代わりに幸運の財布 (ein Glückssäckel) を譲り受ける。大金を手に入れたシュレミールは意気揚々と街に戻るも、人々から影がないことを不気味がられ、非難される。予想外の周囲の反応に戸惑うシュレミールは、その事実が周りに知られることのないよう、密かに暮らす。彼の世話をする召使ベンデルは、影のない主人に対し忠実に尽くす。ある町でシュレミールは林務官の娘ミーナと恋に落ちるが、召使ラスカルの裏切りにより、彼にミーナを奪われてしまう。その間、灰色の男がシュレミールの前に再び現れ、影の返却と死後の魂の交換を持ち掛ける。しかしシュレミールは、その誘惑を拒否し、一人姿を消す。旅をするシュレミールは一步で七千里進む靴を手に入れ、世界中を訪れる。ある時、病に倒れたシュレミールは、ベンデルと未亡人となったミーナがおこなっている救貧院に正体を知られないまま収容される。彼らはシュレミールが残した資金を慈善事業に使っていたのだった。そのことを知ったシュレミールは再び姿を消し、世界探索の旅に出るのだった。

『ペーター・シュレミール』が出版された際に、シュレミールが取引した「影」とはシャミツソーの経歴から「祖国」を意味しているのではないかという解釈がなされた²⁶。だが彼自身は、1834年に出版された第3版の序詩に掲載された「ぼくは生まれついで影をもっている 自分の影をなくしたりはしなかった²⁷」という言葉を除いて「影とは何か」という問いに口を閉ざしている。その後研究者たちの間では「アイデンティティを失った人間の風論である」²⁸、「ユングのいう「シャドウ」を指している」²⁹あるいは「個々一人一人が生まれながらに持つ、市民社会に暮し、そこに影を落とす権利」³⁰など様々な解釈がおこなわれている。

『ティム・ターラー』における『ペーター・シュレミール』についての言及は前書きの場面にある。それはライプツィヒの印刷所でティムが手にしているのがこの本であり、それを目にしたボーイが、ティムに「笑いを失った少年」の物語を教えてほしいと頼む。つまりティムが物語を語るきっかけとしてこの本が登場しているのである。また作中にクレシミール (Kreschimir) という名前の青年が登場する。彼の名前は『ペーター・シュレミール』の主人公シュレミール (Schlemihl)³¹ のアナグラムをなしていることは想像がつかだろう。クレシミールはリュフェットに自分の「目」を売ったが、それを取り返すことに成功しており、物語の中で友人としてティムを支える存在である。

26 アーデルベルト・フォン・シャミツソー (池内紀訳) 『影をなくした男』岩波書店 2010年 146-147頁参照。

27 同書 133頁。

28 深見茂、池内紀訳『ドイツロマン派全集第5巻 フケー…シャミツソー』国書刊行会 1983年 356-357頁参照。

29 梅内幸信『悪魔の霊液 -文学に見られる自己の分裂と結合-』同学社 1997年 334頁参照。

30 ヴィンフリート・フロイント『ドイツ幻想文学の系譜-ティークからシュトルムまで』彩流社 1997年 97頁。

31 Rotwelsch語で「運の悪いやつ」(Pechvogel) という意味を表す。Rotwelschとはドイツで盗賊や悪党などが使っていた言葉である。この言葉はドイツ語、ヘブライ語およびロマが用いていた言葉の語幹を混ぜ合わせたような音をもつ。 Vgl. Max Gottschad: *Deutsche Namenkunde. Unsere Familiennamen nach ihrer Entstehung und Bedeutung*. Berlin: Walter de Gruyter & Co. 1971, S. 140, 516.

2. シュレミールと灰色の男

主人公であるシュレミールは、地位も金も持っていない若者である。彼は紹介状を手に富裕なヨーン氏を訪ねるが、そこでポケットから瞬時に何でも取り出す灰色の男と出会う。シュレミールは並外れた才能も地位も金もない平均的な人物として登場している。彼は社会的地位や裕福な暮らしを夢見ており、灰色の男はそのような望みを抱いている人間を選別して、取引を持ち掛ける。シュレミールのほかにも、灰色の男と取引をおこなっている人間が登場する。それはシュレミールが冒頭で訪れる大豪邸の持ち主、ヨーン氏である。彼は富も名声も手に入れるが、灰色の男の契約書に署名をしたことで、悪魔に魂を奪われる。

ヨーン氏の成れの果てを見たシュレミールは、灰色の男が悪魔であると確信し、幸運の金袋を投げつけ、永遠に契約は結ばないと断言する。シュレミールは、ミーナとの幸せな生活を投げうってでも、最後まで自分の魂を悪魔に譲り渡すことはなかった。彼は軽はずみに悪魔に影を売り渡したことを後悔し、罰を受け、悩み苦しむ。しかし彼は富に溺れることなく悪魔の誘惑に打ち勝ち、人間らしく生きることを選択するのである。そのためシュレミールは七千里進む靴を手に入れたことによって、世界各地を探索するという新たな生きがいを見つけることができたのである。

人間の魂を集めている灰色の男は、文字通り「灰色がかった古風な琥珀織りの燕尾服」³²を着ており、華やかなパーティーの場ではみずばらしい印象であった。人々は、要求したものを瞬時にポケットから取り出すこの男の存在に注意を払わなかったが、彼がこの場にいることに対し、疑問を抱く人間はいなかった。ヴィンフリート・フロイントは、シャミッソーは灰色の男に消費世界における資本主義的な商品世界の特性を見ていると解釈している³³。消費社会で暮らす人間は、欲求が満たされると新たな欲求が生まれる。彼らはその欲求を、新たに物を手に入れることで解消する。欲求の解消のために入手した物は本来不要なものであるが、人間は所有しなければならないという思い込みにとらわれてしまう。そのような「所有のための所有」という考えを促す存在として「灰色の男」は登場していると、フロイントは述べている³⁴。フロイントの指摘したように、灰色の男は人間の所有欲を駆り立てる存在として描かれている。冒頭のパーティーで、灰色の男は客の要望に応え、絨毯やテント、3頭の馬などをポケットから取り出す。彼は「求めているものを即座に手に入れられる」という状況を自ら作り出し、それが当然のことであると人間に思いこませる。そのような環境に慣れてしまった人間は、死後の魂と引き換えにしてまでも、彼を利用して簡単に富や名声を築き、それを維持することに執着する。灰色の男がシュレミールに幸運の金袋を授けることや、それによって手に入れられる豊かな生活をシュレミールが想像することもまた、金によって何でも手に入れることが可能な資本主義社会の特性を物語っていると言えよう。灰色の男は、人間に富を授け、物質的な満足感を与えること

32 Adelbert von Chamisso: *Peter Schlemihls Wundersame Geschichte*. aa.O., S. 156.

33 ヴィンフリート・フロイント 前掲書 95頁参照。

34 同書 91-107頁参照。

で、それに依存させ、金のために行動する思考を人間に植え付けるのである。これらのことから灰色の男は資本主義社会を人格化した人物として物語に登場しているといえる。

第2章 『ティム・ターラー』における「悪魔との契約」の場面

本章では『ティム・ターラー』における「悪魔との契約」のモチーフを前述した『ファウスト』と『ペーター・シュレミール』と比較することで、クリュスが本作品に描いた現代性を考察する。

第1節 血の署名による契約の成立

まずは『ティム・ターラー』における悪魔との契約の場面を見てみる。少年ティムと悪魔リュフェットが競馬場で「笑顔」と「賭けに勝つ力」を取引する。

「ティム、」リュフェットは話し始めた。「私は君が望むだけの金を与えよう。私は君にテーブルの上で現金を渡すことは出来ないのだ。しかし私は君にすべての賭けに勝つ力を授けよう。すべてにだよ、わかるかい？」（…）再びうなずいた。ティムは興奮して尋ねた。「あなたは何が欲しいのですか？」（…）「私が代わりに欲しいものは、君の笑いだよ。」（*Timm S. 40*）

「私たちはインクで署名しなければならないよ。」彼はそう言って（…）おそらく純金製にちがいない万年筆を差し出した。この万年筆は、まるで生温かい液体で満たされているかのように、奇妙に温かく感じられた。（…）ティムは赤いインクで署名をしていた。（*Timm S. 43*）

ティムはリュフェットと、「自身の笑顔」と「賭けに勝つ力」の取引をおこなう。ティムはこの力を利用して、競馬で富を築くことに成功するが、次第に失った笑顔の重要性に気付く。彼は自分の笑いを取り戻すために旅に出ることを決意する。船のステュワードとして働くことになったティムは、ある日、友人と「自分自身が世界一の資産家である男爵リュフェットよりも金持ちになる」という不可能に見える賭けをおこなう。翌日ティムは、その賭けに勝ち、リュフェットが所有する財産の相続人となる。リュフェットは未成年のティムの後見人として現れ、以後二人は行動を共にする。十六歳の誕生日前日、ティムは友人たちから笑いを取り戻す方策を授けられる。それは「ティムが自分の笑いを取り戻す」という賭けをおこなうことだった。リュフェットがそれを妨げようとするが、ティムは一足早く賭けを成立させる。ティムは賭けに勝つ力と相続するはずだった資産をすべて失うが、再び笑いを取り戻すことに成功する。以上が本作品の大まかな粗筋である。

『ファウスト』や『ペーター・シュレミール』と同様に本作品においても、悪魔は契約を完了させるために、血を思わせる赤いインクによる署名を要求する。この血の署名は、悪魔との契約の中で頻繁に用いられているモチーフである。それは「血が所有者の一部をなす」という思想が根底にあるた

めと言われており³⁵、民俗学者ルッツ・レーリヒは「パルス・プロ・トト」(pars pro toto)という言葉で説明している。この思想は旧約聖書の中にも見ることが出来、「レビ記」(17 11)において、「生き物の命は血の中にあるからである。」³⁶という記述がある³⁷。つまり血は、魂や命の象徴というわけではなく、血自体が所有者を表していると言える。血の署名は、その特別な効力によって所有者を契約に縛ることが出来るのである。したがってファウストやティムなどの主人公たちは、血の署名をした契約書を悪魔が所有していることで、一方的に契約を破棄することが出来ず、悪魔から逃れることが困難となるのである。

他方、『ティム・ターラー』における『ファウスト』や『ペーター・シュレミール』との相異点として、詳細な契約書の存在が挙げられる。契約を完了させるために、羊皮紙に数行の言葉と署名をおこなうだけでよかったメフィストフェレスや灰色の男とは違い、リュフェットは非常に細かい契約書を作成している。以下はその契約条項の要約である。

「1. この契約はリュフェットとティムの間で結ばれるものとし、2. ティムが譲渡した笑いはリュフェットの任意で使用出来る。3. ティムはいかなる賭けにも勝つことが出来る力を譲り受ける。4. 両者はこの契約に関して他言してはいけない。5. 沈黙を破った者は、譲り受けた能力を失う。6. ティムが一度でも賭けに負けたら、リュフェットは笑いを返還する。しかしその場合はティムも賭けの力を失う。7. この契約はサインをした時から有効となる。」

(Timm S. 40-43)

ティムはこの契約内容をリュフェットと共に読み合せ、確認した後に署名を促される。このような詳細な契約書による取引方法は、資本主義社会における経済活動の一場面を思わせる。ほかにも、リュフェットが笑顔の効果を部下に調査させる場面や、リュフェット自身がティムの行動を監視し、笑顔の魅力を自ら確認するなど、現代社会を反映した取引方法が描かれている。クリュスは悪魔と主人公の契約に関する伝統的な方法を採用しながら、経済成長を続ける西ドイツ社会の状況を取り入れ、時代に即した「悪魔との契約」の形式を生み出したのである。

第2節 孤独な主人公

「悪魔との契約」では、悪魔は主人公たちが精神的あるいは物質的に欲求を満たすことの出来る魅力的な取引対象を準備することで、契約を成立させてきた。彼らは取引相手が抱いているコンプレックスの解消や願望を実現させることによって、人間を契約に導く。その内容は各作品によって異なる

35 溝井裕一 前掲書 96-98頁参照。

36 日本聖書協会『聖書 新共同訳』福音社 2002年 163頁。

37 「申命記」(12 23)にも同様の記述があり、「血は命であり、命を肉と共に食べてはならないからである。」と書かれている。

が、ファウストは彼の望みを叶えるために悪魔が手助けをすることであり、シュレミールは社会的地位や資金を手に入れて、豊かに暮らすことであった。本作品において主人公のティムは、信じる心と強い好奇心を持った無邪気な少年である。そのためティムは、先行作品の主人公たちの様に、悪魔が取引対象として誘惑できるほどの自身に対する劣等感や実現困難な願望を抱いていなかった。しかしリュフェットはティムの心の隙間を見つけ出し、取引を持ち掛ける。その結果、ティムは「賭けに勝つ力」を手に入れるのである。

一見すると、この能力は無限の富の約束であると考えることが出来る。ではティムは「無限の富」を強く望んでいたのだろうか。たしかに彼は継母や義兄、生活のために毎日働きに出る父親と共に、薄暗い裏通りで貧しい暮らしをしていた。不機嫌な継母の理不尽な怒りや義兄の苛めに耐えて生活するティムは、明るい表通りの大きな家で豊かに暮らすことを想像することもあったが、それが叶わぬ夢であることを理解していた。彼は自分の努力によって継母や義兄と良い関係を築くことが出来ると信じ、改善へ向けて努力するような子供であった。このように考えると、ティムが「無限の富」を求めて取引に応じたとは考えにくい。

では何故ティムはこの契約に同意したのだろうか。その理由を理解するためには、契約がおこなわれた場所が重要であると考えられる。取引の場となった競馬場は、ティムにとって父親との思い出の場所だったのである。ティムは三歳のころまで陽気な実母と父親と共に、明るい表通りの家で暮らしていた。実母は遊んでいるティムの姿を見ては、楽しげに笑い転げた。笑いの絶えない家族三人の生活は、実母の死によって終わりを迎える。彼女が亡くなったことで、ティムにとっての「本当の家族」は父親だけになってしまう。その後経済的に苦しくなった父親は毎日働きに出かけ、ティムを一人にしないために再婚する。しかしティムにとって継母と義兄は心許せる「家族」にはならなかった。辛い毎日の中でティムが唯一笑うことが出来た時間が、毎日曜日に父親と出掛ける競馬場だったのだ。父親は、心細い思いをしているティムを案じ、競馬で勝ち、その賞金で家族と豊かな生活を営むことを望んでいた。彼は「家族のために競馬で大金を手に入れる」ことを夢みていたのであった。だが彼は、その夢を実現することなく、不慮の事故で亡くなってしまふ。葬儀の日、悲しみに暮れるティムが向かった場所は、競馬場であった。ティムにとって競馬場は、賭けを楽しむ場ではなく、父親との思い出の場所であったのだ。そこでティムはリュフェットと出会う。リュフェットは即座に、ティムの笑顔の魅力と父親を失った喪失感に気づき、取引を持ち掛ける。リュフェットはティムに父親の夢であった「賭けに勝つこと」を提案するのである。このような経緯を考えると、ティムは亡き父の夢を実現するためにリュフェットと取引したと考えられる。つまり、両親を失い孤独なティムにとって悪魔との契約を決断した理由は、富の獲得などではなく、父親の夢を実現すること、つまり失った「家族」の存在であったのだ。

そのような理由から手に入れた「賭けに勝つ力」を、ティムは自身の笑顔を取り戻すために活用する。ファウストやシュレミールは、悪魔から手に入れた取引対象を自身が失った物を取り戻すために

活用することはなかった。しかしティムは「絶対に勝つことが出来ない賭け」をおこなうことで、リュフェットに無理やり契約を破棄させようとするのである。ティムは、先行作品の主人公たちとは違い、手に入れた力を有効的に活用し、見事笑顔を取り戻すことに成功するのである。

第3節 資本主義社会の擬人化としての悪魔

人間と取引をおこなう相手として登場するのが、悪魔である。彼らは、人間を取引に誘うために姿を現す。悪魔が人間から譲り受ける対象は多くの場合、死後の魂となっている。メフィストフェレスや灰色の男も死後の魂を獲得するために契約をおこなっていた。彼らは契約に従い、出し抜くことなく契約を実行するが、実際に取引対象を手に入れることが出来るのは、非常に稀であった。

悪魔リュフェットは、「真一文字のような口」に「鋭い青い目」そして「帽子も背広と同じチェック柄」のスーツを着て登場する。(Timm S. 27) 紳士的な外見を装っているリュフェットであるが、彼が悪魔の化身であることは「全ての賭けに勝つ力」を提供することからも容易に想像出来る。その他にも彼の名前に悪魔であることが示されている。リュフェット (lefuet) という名前は、悪魔 (teufel) の裏返しの文字であるのだ。また彼はアスタロート (Astaroth) という悪魔の名前も持っており、部下のグランディッツィ³⁸とその名で会話をしている場面も存在する。アスタロートという名の悪魔は「地獄に権力を誇る大侯爵」³⁹であり「諸学問を徹底的に教授する」⁴⁰性質があるという。クリュスがリュフェットにこの名前を付けた理由もうなずける。本作品においてリュフェットは、資産家で大企業の経営者であり、男爵の称号を有している人物である。また、彼は本人の意思にかかわらず、立派な経営者として育て上げるためにティムを教育する。ティムは「世界一の資産家であるリュフェットよりも金持ちになる」という賭けをおこなったことで、リュフェットの後継者となった。そのため物語後半の多くの場面で、企業経営の仕組みや株取引の説明、世界経済の関係性といった資本主義社会における経済活動の知識をリュフェット自らがティムに教授する。その他にもリュフェットは、ティムに資産家としての振る舞いや実際の経済活動を学ばせるため、世界各地を渡航する自分に同行させる。これらのことからクリュスが、悪魔界の階級制度をこの作品の中に取り入れていることがわかる。

このようなリュフェットの人物設定は、先行作品との大きな相違点ということが出来る。各作品において悪魔たちは人間らしい装いで登場するが、この世の人物という設定はなかった。しかしリュフェットは、世界一の資産家と大企業の経営者として人間社会に溶け込んでいるのである。彼はリュフェット社という会社を経営しており、この会社は世界を股にかけた国際企業である。彼は世界経済

38 グランディッツィもまた悪魔であり、ベヘモートという悪魔の名前を所有している。ベヘモートとは「威張っているが鈍重かつ愚味な魔人であり、がっしりと逞しく、美食や大食を専門分野とする。デーモンとしての地位を固めており、人間に暴飲暴食をさそう。主に象の姿で描かれることが多い。」という特徴があげられる。これは豪華な昼食をふるまったりする性格や、がっしりした体格であることなどグランディッツィの人物像と一致する。フレッド・ゲティンクス 前掲書 356-357頁 およびコラン・ド・ブランシー 前掲書 247-248頁参照。

39 コラン・ド・ブランシー 前掲書 119頁参照。

40 同書 31頁参照。

の一端を担い、国際社会の中心にいても過言ではない。しかしながら、この会社は利益を唯一の目的とし活動する会社であり、そのためなら弱者を利用して富を得ることもいとわない。例えば、彼らは貧しい国に援助という形で贈り物をするが、その贈り物を使い続けるための費用はリュフェット社の利益となって戻ってくるという経済の循環を作り出した。さらに戦争を利用して、破壊された都市を再生する際に生まれる利益を獲得する。このような会社の方針に、ティムは嫌悪感を抱いており、金という利益だけを追い求めるリュフェットに対し疑問を呈している。リュフェットは自身の資産を受け継ぐティムに対し、次のように述べる。

「もうすぐあなたは王国を相続するでしょう。(…)その時には、感情ではなく数字が支配します。」(Timm S.168)

リュフェット社の役員のはほとんどは、自身の利益のために働き、そのトップにいるリュフェットもまた自分の立場を維持し、より多くの財産を築くために会社を運営する。彼らにとって会社は、自身の富を築くための場にすぎないのである。リュフェットは、快適な暮らしをもたらすものは金であると主張し、ティムにも会社を運営する際には、より多くの利益を得るための計算を第一に考えるよう求めるのである。彼は金の力を盲信しており、自身だけでなく人間が金に絶対的な信頼を置くように仕向ける。リュフェットがティムに授けた「賭けに勝つ力」も、ティムが富に溺れ、笑顔を忘れるように促すために提供したのであった。実際、競馬で稼いだ巨万の富は、ティムの継母と義兄を狂わせ、金によって得られる贅沢な生活に依存させた。リュフェットは、金によって手に入れることが出来る物理的な満足感こそが、生きていくうえで重要であると主張するのだ。さらに彼は市場に出回る商品と同じように、金によって人びとの沈黙や優遇された対応、そして笑顔や瞳と言った人間らしい魅力までも買うことが出来ると述べる。リュフェットは、あらゆるものを商品に置きかえ、金によって売買することが可能な資本主義社会における消費社会の危険を表していると言えよう。

上述してきたようなリュフェットの人物設定は、『ペーター・シュレミール』の灰色の男と似ている点があるように思われる。灰色の男もまた、資本主義社会の奇怪な人格化であった。しかし、灰色の男は人びとに欲求を促す存在として描かれているのに対し、リュフェットは資本主義社会を動かす大資本家、つまり利益を搾取する成功者として描かれているのである。

これらのことから、クリュスはリュフェットに資本主義社会の特徴や問題点を描いていると言える。リュフェット社はあくまでも資本主義社会における会社の一例であるが、クリュスは会社運営をこのように描くことで、子供たちにその実態を示し、経済活動の仕組みをわかりやすく説明している。同時に、資本主義社会の経済活動の悪魔的側面を描いており、金が持つ魅力と危険を示唆していると言える。そしてこのような悪魔の人物設定こそが、「悪魔との契約」のモチーフにおける現代性の大きな特徴といえる。

第4節 人間らしさの取引

「悪魔との契約」の物語において、悪魔たちが人間から手に入れる取引対象のほとんどが死後の魂であり、メフィストフェレスや灰色の男も同様である。しかし本作品において、リュフェットが望んだ取引対象はティムの笑顔であった。「笑顔」という表情の取引は、本作品の中でどのような意味を持っているのだろうか。

ティムの「お腹の奥からわきあがる」(Timm S. 22)「最後にはしゃっくりのつくおかしい笑い声」(Timm S. 26)は、人々を惹きつける特別な魅力を秘めていた。次の場面はティムが通う学校の場面である。

ティムの爆笑は予想外に、先生も含めてクラス全体が笑わずにはいられないようなおかしい状況を作り出した。先生は指を上げていった。「笑顔の大砲とは、私が唯一重要と考える大砲だよ、ティム。しかし授業中には君の笑顔の大砲を放たないように。」(…)すべての人々はティムの笑い声を気に入った。(Timm S. 34f.)

ティムの笑顔は人びとに伝染し、周りの人々をも楽しませた。ティムは笑顔を通じて人々との絆を深めたが、幼いティムにはその効果を理解することは出来なかった。それゆえティムは、笑顔を不要なものと考え、リュフェットとの取引に応じる。しがし取引後すぐに、ティムは以前とは違った自分に変化していることに気付く。

小さなアヒルたちが草の間をぎこちなく歩きまわっていた。昨日のティムなら間違いなく彼らを見て笑っただろう。今日、ティムは彼らを見ても全然面白く思わなかった。そしてそのことはティムを悲しませた。ティムはアヒルたちを、まるで空虚な壁を見ているように、何の興味も抱かずに見つめていた。(Timm S. 46)

今までは些細なことに喜びを見出すことが出来たティムであったが、笑顔を失った今では気にも留めない自分に変化していることに気付く。ティムは笑顔を失うと同時に、物事に対する興味や好奇心、喜びや驚き、楽しさなどといった感情や表情を失ってしまったのである。ゆえにティムは、常に不機嫌そうな表情で過ごさなくてはならなくなった。「賭けに勝つ力」のおかげで生活に困らなくなったティムであったが、その後リュフェットの相続人となったことで、さらに多くの金と財産を手に入れることとなる。彼は何不自由ない暮らしを提供してくれる富の力に圧倒され、それがもたらす豪華で快適な生活を魅力的に思う。しかし喜びを感じられず、笑顔を浮かべられないティムにとって、どんなに豪華絢爛な生活であっても、それは人間らしい生活ということは出来なかった。ティムは笑顔を失った自身のことを次のように表現している。

うわぐずりのかかったカラフルな陶器の犬が雨の中に光っていた。しかし、彼らがじっと寄る辺もなく厳しい無意味な規律のうちに雨の中で立ち尽くしている様は、ティムにははじめに見えた。ティムはもし自分が近いうちに再び笑うことが出来なければ、自分もこの陶器の犬のようになってしまうと感じた。(Timm S. 173f.)

この場面にクリュスが考えるティムの笑顔の意味がよく表現されている。笑うことが出来ない人間とは、ただ雨に打たれて庭に並んでいる陶器製の犬と同じだというのである。「若き資産家」を演じているティムは、いかに贅沢な暮らしをしていても命のない置物と何ら変わりなく、与えられた役割を果たすだけの存在なのだ。ティムが、自身に押し付けられた「資産家」という役割から抜け出し、自由に人間らしく生きるためには「笑顔」を取り戻すことが必要不可欠なのである。

笑顔を失ったことで「人間らしさ」も失くしたティムに対し、その魅力を手に入れたのがリュフェットであった。リュフェットは人びとを惹きつけるその魅力を、彼の運営する会社経営において利用出来ないかと考えたのであった。人間的な魅力を持ち合わせていない悪魔は、それを補うために契約をおこなうことを考えついたのである。リュフェット自身も「人々の心を支配する力を手に入れるために」(Timm S. 120) ティムの笑顔を手に入れたと述べており、それによって周りから好意的な印象を持たれることが多くなった。本作品においてリュフェットは、このような「人間らしさ」の取引をティム以外の人間ともおこなっている。それは、クレシミールという名の貧しい少年から彼の「温かい茶色」の「優しそうな」目を手に入っていたのであった。(Timm S. 40) クレシミールの目を所有するようになったリュフェットの好感度はあがり、以前よりも親しみやすく優しげな表情を得ていた。この取引も、リュフェットが人間らしさを身に着けることで、より簡単に人々との関係を良好に保つことを目的としていた。

しかしリュフェットが手に入れた笑顔は、その威力を彼自身にも発揮する。今までは憤りや怒りを感じた際、破壊行動や暴言によってそのストレスを発散させていたリュフェットであったが、笑うことによってその衝動を抑えることが出来るようになったのである。自身の感情までもコントロールしてしまう笑顔の威力を知ったリュフェットは、その魅力にとりつかれる。メフィストフェレスや灰色の男は最終目的である死後の魂を手に入れることは出来なかったが、リュフェットは自身の欲した取引対象である「笑顔」を見事手に入れ、社会の中でまた自分自身のために活用する。このことから、20世紀における悪魔は「死後の魂」などではなく、現実世界において利益を得るために有効な、「人間の心を魅了する能力」を欲しているということが出来る。

このように本作品でクリュスは、人間らしさの象徴として笑顔を描いた。笑顔を失ったことでティムはその重要性に気付き、取り戻すべく悪魔と対峙する。家族との確執を乗り越え、資産家の後継者としてリュフェットに同行した経験は、ティムにさまざまな知識を与え、広い視野を兼ね備えた人間

へと成長させた。そして「人間らしさ」を獲得した悪魔は、自身の目的を達成するだけでなく、笑うことで自身の心も支配することが出来るようになった。クリュスは笑顔の取引によって失った「人間らしさ」を、ティムの視点からだけでなく、それを獲得した悪魔の視点からも描くことで、その重要性をより強く伝えていると言えるだろう。

おわりに

本稿は、『ティム・ターラー』における伝統的な「悪魔との契約」のモチーフに注目し、先行作品である『ファウスト』と『ペーター・シュレミール』との比較をおこなった。そこから本作品に描かれた「悪魔との契約」の現代性を幾つか取り出すことが出来た。

一つ目はリュフェットとティムがおこなった取引の形式である。リュフェットは契約時に、伝統的な血の署名をティムに求める一方で、現代の契約社会を思わせる詳細な契約書を作成している。このように「悪魔との契約」における伝統と現代社会の特徴を兼ね合わせた契約方法となっている。

二つ目は悪魔の人物設定である。リュフェットは悪魔としてティムの前に現れるだけでなく、世界経済を動かす会社の経営者として、人間社会に溶け込んでいる。クリュスはリュフェットを資本主義社会の中心に置くことで、利益を搾取することだけに力を注ぐ彼の経営方針や、金に絶対的な信頼を置き、独裁的で利己的に振る舞う姿を描くことで、経済活動の危険性を示唆していると言える。さらにリュフェットは「金によってあらゆるものを得ることが出来る」と主張し、人間が金に絶対的な信頼を置くよう仕向ける。

三つ目は契約をおこなった際に手に入れた取引対象を、主人公と悪魔が利用するという点である。ティムは「賭けに勝つ力」を利用して笑顔を取り戻し、リュフェットは笑顔を自身のビジネスのために活用する。

最後に取引対象の変化が挙げられる。クリュスは、取引対象として「笑顔」を選択した。若き主人公ティムは笑顔を喪失したことによって、人間らしい暮らしには笑いが大切であることを認識する。リュフェットは、笑顔の所有により人々から好意的な印象を抱かれるようになり、人間らしい魅力を得ることが出来た。笑顔の威力はそれだけにとどまらず、リュフェットの心にも影響を与える。このようなリュフェットの変化から、現代の悪魔は死後の魂などではなく、現実社会で多くの人間を魅了するために取引をおこなうと言える。

これらの『ティム・ターラー』に描かれた現代性は、物語の舞台を資本主義社会に設定したことに起因する。クリュスは経済復興が進む西ドイツ社会を目の当たりにし、その社会を反映させながらこの作品を執筆したことは言うまでもないだろう。クリュスは資本主義社会という現実を『ティム・ターラー』に描くことで、その実態を示し、リュフェットのような利己的で横暴な人間が生まれる危険性を指摘している。ただし、クリュスは経済活動がもたらす豊かな生活も魅力的に描いている。そしてティムが陥る、快適な暮らしを運んでくれる「富」と笑顔に代表される「人間性」の葛藤がこの小説

の大きなテーマとなるのである。

文献

テキスト

Krüss, James: *Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen*. Hamburg: Verlag Friedrich Oetinge, 2006.

ジェームス・クリュス（森川弘子訳）『笑いを失くした少年』未知谷 2004年。

Chamisso, Adelbert von: *Peter Schlemihls Wundersame Geschichte*. In: *Adelbert von Chamisso Sämtliche Werke in zwei Bänden. Zweiter Band Prosa*. München, Wien: Carl Hanser Verlag, 1982.

Doderer, Klaus: *James Krüss Insulaner und Weltbürger*. Hamburg: CARLSEN Verlag GmbH, 2009.

Goethe, Johann Wolfgang von: *Faust. Texte*. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag, 1999.

Gottschad, Max: *Deutsche Namenkunde. Unsere Familiennamen nach ihrer Entstehung und Bedeutung*. Berlin: Walter de Gruyter & Co., 1971.

Hauf, Wilhelm: *Das kalte Herz. / Das kalte Herz II*. In: *Hauffs Werke in zwei Bänden. Zweiter Band*. Berlin und Weimar: Aufbau-Verlag, 1970.

Hoffmann, E. T. A.: *Die Abenteuer der Sylvester-Nacht*. In: *E. T. A. Hoffmann Fantasiestücke in Callott's Manier Werke 1814*. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag, 1993.

Lewis, James R.: *Magical Religion and Modern Witchcraft*. Albany: State University of New York Press, 1996.

アーデルベルト・フォン・シャミッソー（池内紀訳）『影をなくした男』岩波書店 2010年。

アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』大修館書店 1998年。

アルベルト・ビルショフスキ（高橋義孝、佐藤正樹訳）『ゲーテ その生涯と作品』岩波書店 1996年。

ヴィンフリート・フロイント（深見茂訳）『ドイツ幻想文学の系譜 ティークからシュトゥルムまで』彩流社 1997年。

梅内幸信『悪魔の霊液－文学に見られる自己の分裂と結合－』同学社 1997年。

小塩節『ファウストヨーロッパ的人間の原型』日本YMCA同盟出版部 1972年。

ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（柴田翔訳）『ファウスト上・下』講談社 2003年。

コラン・ド・ブランシー（床鍋剛彦訳）『地獄の辞典』講談社 1990年。

J.B.ラッセル（大瀧啓裕訳）『悪魔の系譜』青土社 2002年。

J.B.ラッセル（野村美紀子訳）『メフィストフェレス－近代世界の悪魔』教文館 1991年。

中西敏夫編『児童文学者人名事典－外国人作家編－』出版文化研究会 2000年。

野村玄『ドイツの子どもの本－大人の本とのつながり』白水社 1991年。

フレッド・ゲティンクス (大瀧啓裕訳) 『悪魔の事典』 青土社 2008年。

深見茂、池内紀訳 『ドイツロマン派全集第5巻 フケー…シャミッソー』 国書刊行会 1983年。

溝井裕一 『ファウスト伝説 悪魔と魔法の西洋文化史』 文理閣 2009年。

道家忠道訳 『ファウスト その源流と発展』 朝日出版社 1974年。

Der Handel ums „Lachen“ im Roman „Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen“ von James Krüss — In besonderer Hinsicht auf das Motiv „Teufelspakt“—

Kumiko URUSHIDANI

Abstract

James Krüss (1926-1997) zählt zu den bedeutendsten Kinderbuchautoren der Nachkriegszeit. Seine Werke wurden in den 70er Jahren unter Jugendlichen aber auch unter Erwachsenen sehr beliebt. Die vorliegende Arbeit untersucht seinen 1962 erschienenen Roman „*Timm Thaler oder Das verkaufte Lachen*“ (sic). Dieser Roman behandelt das traditionelle Motiv „Teufelspakt“ vor dem Hintergrund einer modernen kapitalistischen Gesellschaft. Timm Thaler, die junge Hauptperson, verkauft dem Baron Lefuet (Anonym für Teufel) sein anziehendes Lachen und bekommt dafür die Fähigkeit, jede Wette zu gewinnen. Erst später merkt Timm, wie wichtig ihm sein Lachen war, und versucht, es zurückzubekommen. In der deutschen Literatur sind verschiedene Formen vom „Teufelspakt“ dargestellt. Die vorliegende Arbeit will dieses Motiv im „Timm Thaler“ unter anderem mit „*Faust*“ von Johann Wolfgang von Goethe und „*Peter Schlemihls Wundersame Geschichte*“ von Adelbert von Chamisso vergleichen, da sich Krüss in seinem Werk auf diese beiden Werke direkt bezieht.

Aus diesem Vergleich heben sich folgende Eigenschaften von „Timm Thaler“ hervor. Erstens ist es die moderne Form des Pakts. Einerseits ist die Tradition der „Unterschrift mit dem Blut“ aufbewahrt, aber der Vertragstext ist so genau ausgeführt wie ein Vertrag in der gegenwärtigen Geschäftsszene in Deutschland. Zweitens ist es eine junge Hauptperson. Dadurch erzielt Krüss eine wichtige Aufgabe als ein Kinderbuchautor, den Bildungsweg eines jungen Helden zu erzählen. Drittens ist es die Charakteristik vom Teufel. Krüss stellt den Teufel als einen reichen Chef eines Konzerns dar, dem es nicht mehr eine „Seele“, sondern der Gewinn anliegt.

Die wichtigste Eigenschaft dieses Romans ist aber, dass Krüss als das Handelsobjekt das „Lachen“ gewählt hat. Der Teufel wünscht sich ein anziehendes Lachen, um sich in der Öffentlichkeit als einen charmanten Chef zu zeigen und damit auch im Geschäft Vorteile zu ziehen. Der junge Held Timm erkennt auch den Wert des „Lachens“ für ein menschliches Leben. In dem ganzen Roman geht es nun um den Konflikt zwischen „Reichtum“ und „Lachen“ oder „Menschlichkeit“. Auf diese Weise ist es dem Autor gelungen, den Kindern die Bedeutung der „Menschlichkeit“ auch in einem kapitalistischen Deutschland überzeugend darzustellen.